

週日(召命のミサ)の説教

金 大烈 神父 2010年7月9日(金)

《神様の御国のために》

主の平和

今日は二つの点について皆様と分かち合いたいと思います。一つは今日、マタイが伝える福音(マタイ 10・16-23)の内容は迫害時代のことを描いてあります。そして、マタイ福音が伝えるように、世界のあらゆる所で、実際にこのような迫害が厳しく言葉通りであった事を、私達は皆学んで分かっています。日本でも沢山の人が殉教されました。そういう事によって、私達の信仰の道の歩みが出来ていると私達は信じています。

さあ、これは迫害時代の話ですが、今はどうでしょうか。迫害という言葉は狭く考えると、物理的に、具体的に信仰に対して害を加える事を言います。もっと広い意味で言いますと、信仰の生活をしなければならない雰囲気や強要することを迫害と言います。例えば上手く行っていた会社が崩れたとします。私は信仰の生活をちゃんとしていて、神様を賛美しながら今までやって来たのに「何故、私の家族にこのような痛みを下さるのか」と、揺れ動く雰囲気を作る事も迫害です。

そして健康を失って「ああ、丈夫な体だったのに、私にはまだしなければならない事が沢山あったのに、このように倒れてしまってどうすればいいのか、神様は本当にいるのか」と、疑いを生じるような雰囲気もやっぱり迫害だと思います。私達は両側に立つことが出来ます。迫害する者になる可能性もあります。私の言葉によって、私の態度によって、相手が「神様を信じなくてもいいじゃないの。」と言われる事になったら、私達も迫害に加担する立場に立ちます。逆に私達が信仰の生活を一生懸命にしようとしていても、何かの事によって自分もがっかりして「いいよ、これは私のせいじゃない」と、思ってしまうそういう心も、ある意味で迫害する立場に立つ事になります。

反対に今の私達が一生懸命やろうとしても色々な雰囲気があります。例えば、この日本の社会では宗教的な話をしてはいけないような雰囲気があります。会社では誰がどんな信仰を持っているか全く分かりません。分かってもそれは望ましくありませんという雰囲気です。そうですね。私が今ある大学で勉強を教えているのですが、そこでは私の身分を隠さなければいけないのだそうです。始めての条件が「あなたが神父であることを言っちゃダメです。」という話を聞きました。「それは構わないですけど」と笑いながら応えましたが、そのような雰囲気になっています。これは世の中の全体的な雰囲気ですね。これも一つの迫害ではないかと思えます。

さあ皆様、あるお母さんの息子さんが一生懸命教会の生活をしていたのですが、ある日突然教会に通わなくなったそうです。そして、そのお母さんが重い病気にかかって手術を受けたそうです。手術は成功して回復室に運ばれました。お母さんに会うためにその息子さんが回復室にやってきたそうです。待っているうちにお母さんの目が覚めて、息子さんを見たときに「教会にまた行ってほしい」

と言ったそうです。その言葉を聞いてその息子さんは、教会にまた通い始め、今神父になっています。

結局私達が、色々な話をどのようにするかによって、ある人の人生が、180度変わる可能性がいつもあることを意識しなくてはなりません。

皆様、私達は神様のために、神様の御国を建てようと、築こうとそのために努力する事が出来ないかも知れません。しかし反対側で、何か崩す役目をしてはいけないのではないのでしょうか。先ず家庭の中から神様の御国を伝えようと、築こうとする努力が何よりも必要ではないかと、今日の福音を通して考えて見ました。

二つ目は、私がいつも申し上げて来たのですが、「隠れキリシタンという言葉を使わないで下さい。」と皆様に話した事を覚えていらっしゃるでしょうか。それは迫害するものの立場からという話だと何回も申し上げました。今日それをイエス様がおっしゃっています。『迫害されたときは、他の町に逃げていきなさい』と。(マタイ 10・23) 自分の信仰を守るために何処かへ逃げて、そこで「信仰の生活を保つために頑張りなさい」という話です。もし捕まったら、自分の信仰のために殉教することは当たり前かもしれません。わざわざ「私はカトリックの信者ですよ」と、このような信仰を見せる人もいるでしょう。そういう意味で、何処の国の殉教者でも逃げ場を探さなかったら殉教者はあり得ません。何故、日本だけ「隠れキリシタン、隠れキリシタン」といって否定的なのでしょう。それは間違いだと思います。何処かに避けて、そこから信仰を保とうとするその努力、それが世界中どの国でも私達の先祖達が、殉教者達が見せてくれた姿だと思います。ですから「隠れキリシタン」という言い方をしないで私達の殉教者、信仰の先祖として受け入れればいいのではないかと思います。

さあ、今日は召命のミサですね。弟子達を遣わせながらイエス様は『狼の群れに羊を送り込むようなものだ。』と、あなたがたに待っているのは本当に暗い事ばかり、辛い事ばかりとおっしゃっていますよね。皆様のご家族の中にも司祭や修道者がいらっしゃると思いますが、それはある意味で誇りかも知れません。しかし、その人達のために皆様がどれくらい絶え間なく祈っているのでしょうか。

司祭とか修道者は、自分達が神様の呼び掛けに答えてその道を歩んでいる事です。この道は何よりも神様との結び合いがなくては歩めません。悲しい事なのですが、実際に多くの司祭や修道者の顔に喜びが浮かばないです。そういう姿がよく見えます。これは個人的に疲れるかどうかの問題ではありません。迫害があるかどうかの問題でもありません。どんな状態でもその人には感謝の、そして喜びの何かが浮かばなくてはなりません。しかし、沢山の司祭達を見ても、疲れて自分に負かされている、自分が頂いているその召し出しについても意欲を失っているように見えます。皆様祈って下さい。彼らのために、全ての教会の信者が祈りを捧げなければならないと思います。祈りがあれば司祭達、修道者達がはずれて誘惑に負けることはないでしょう。

今日もう一回、改めてお願い致します。司祭、修道者そして神学生、召命の夢を持っている子供達、その人々を神様が守って下さるように皆様のお祈りをお願い致します。

ありがとうございました。

派遣の前に

さあ、皆さんに宿題を差し上げます。

“毎日大きな声で5回笑ってください。”「どうしたのだろうかあの人は」と言われても気にしないで下さい。「気がふれた」と言われてもいいのです。ぼんやりしていても「アハハハ」と大きな声で笑ってください。約束しましょう。条件無しに笑って下さいよ。

ありがとうございました。